



オリエンタリズムと「日本」を語る「民話」のメディア展開 : Lafcadio Hearnの”The Story of Mimi-Nashi-Hôïchi”を例として

遠田, 勝

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 51:1-18

(Issue Date)

2018-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010611>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010611>



オリエンタリズムと「日本」を語る「民話」のメディア展開

—Lafcadio Hearn の “The Story of Mimi-Nashi-Hôichî” を例として

遠田 勝

はじめに

ラフカディオ・ハーンの「耳なし芳一」は、『怪談』の巻頭を飾る作品であり、その知名度からいっても完成度からいっても、ハーンが日本で目指した再話物語の頂点を示す傑作である。

ここ何年か、わたしは「雪女」や「貉」といったハーンの代表的怪談をとりあげ、その材源の研究・成立過程の考証と相補する形で、それぞれの作品が、ハーンの没後、とりわけ第二次世界大戦後に学術的・芸術的関心の中心に躍り出た「民話」というジャンルのなかに、どのように取り入れられ、どのように影響を与えたかを調べてきた¹。その過程で、「民話」における、学問的曖昧さや偽装を批判し、また逆に、その多方面への芸術的展開、とくに口承文芸や、方言を用いた語りの創出、また「民話劇」に代表される舞台芸術や、一九五〇年代の、まだ登場したばかりのテレビやアニメとの連携に注目し、その成果や意義に目を向けた²。

この観点からいうと「耳なし芳一」には二つの興味深い特徴がある。

その第一は「耳なし芳一」の構成・プロットにおいて、原作からの大きな逸脱や変更がほとんど見当たらないことで

ある。これは日本時代のほかの怪談において、前例のないことではないが、これだけの長さをもった、しかも、技巧を凝らした傑作が、ほとんど原話のままのストーリーであるというのは、やはり注目に値し、この観点から成立過程をもう一度、振り返る必要がある。

第二の特徴として「耳なし芳一」は、これだけ著名でよく読まれている作品であるのに、意外にも口承の「民話」としては、あまり流布していないことがあげられる。そういうと、いや、民話・伝説集のたぐいを開けば、多くの書物に「耳なし芳一」は載っていると反論されそうだが、それらの採話や記録のほとんどに、わたしは口承性を感じない。「話者」「語り手」や「記録者」の名前が明記してある場合でも、それは「耳なし芳一」を「語った」というよりは「書き直した」もののように読める。ハーンの創作から出て、多くの「口承」民話を生み出した「雪女」や「貉」と比べると、それは確かに「耳なし芳一」の特徴といえそうで、この物語のどこが特殊で、なにが口承化をさまたげていたのか、それをこれまで同様、成立過程の考証と結びつける形で確認しておきたい。本論文ではこの第二の特徴を中心に論じることにする。

「芳一ばなし」と口承民話

ハーンの「耳なし芳一」の成立過程については、すでにいくつかの先行研究があり³、それらを参照しながら、ハーン
の作品に至る系譜を簡単にまとめれば以下のようなになる。⁴

「耳切れうん市が事」 『曾呂利物語』 (寛文三、一六六三年)

「小宰相の局、ゆうれいの事」『宿直草』（延宝五、一六七七年）

「赤関留幽鬼」『御伽厚化粧』（享保一九、一七三四年）

「琵琶秘曲泣幽霊」『臥遊奇談』（天明二、一七八二年）

"The Story of Mimi-Nashi-Hôichi" in *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*, Houghton Mifflin Company, New York, 1904.

もっとも古い『曾呂利物語』からハーンの『怪談』に至る五つの物語を本論では宮田尚の論文の呼称を借りて「芳一ばなし」と呼ぶことにする。これはもちろん、ハーンの「耳なし芳一」に至る系譜ということで、主人公の名前がすべて「芳一」であるということではない。途中、欠落している物語があったかもしれないが、「芳一ばなし」は、おおむね、この順番でそれぞれが先行する作品を参照しながら書き継がれ、英語版の「耳なし芳一」に結実したと考えられる。

そうした書承の流れとは別に、口承民話の系譜が存在し、こちらのほうが重要であるという考えもある。柳田国男が一九二七年に発表した「鹿の耳」という論考がその代表で、その一節「耳切団一」において、柳田は以下のような主張をしている。これは民俗学の立場からみた「耳なし芳一」および「芳一ばなし」についての代表的な考えで、冒頭にあげた「耳なし芳一」の第二の特徴についても重要な示唆を与えてくれるので、ここで少し長めに引用しておきたい。

小泉八雲の「怪談」といふ書で、始めて知ったといふ人は却つて多いかも知れぬ。亡霊に耳を引きむしられた昔話が、ついこの頃まで方々の田舎にあつた。被害者は必ず盲人であつたが、その名前だけが土地によつて同じ

でない。小泉氏の話は下ノ関の阿弥陀寺、平家の幽霊が座頭を呼んで平家物語を聴いたことになつて居り、その座頭の名はホウイチであつた。面白いから明晩も必ず来い。それまでの質物に耳を預つて置くと言つたのは、すこぶる「宇治拾遺」の瘤取りの話に近かつたが、耳を取るべき理由は実は明かでなかつた。

ところがこれと大体同じ話が、阿波の里浦といふ処にかけ離れて一つあるので、右の不審がやや解けることになる。昔団一といふ琵琶法師、夜になると或上臈に招かれて、知らぬ村に往つて琵琶を弾いてゐる。一方には行脚の名僧が、或夜はからずも墓地を過ぎて、盲人の独り琵琶弾くを見つけ、話を聴いて魔障のわざと知り、からだ中をまじなひしてやつて耳だけを忘れた。さうすると次の晩、例の官女が迎へに来て、その耳だけを持つて帰つたといふので、これは今でも土地の人々が、自分の処にあつた出来事のやうに信じてゐる。耳を取つたのが女性の亡魂であつたことと、僧が法術を以て救はうとした点とが明瞭になつたが、それでもまだまじなひの意味がはつきりしない。

それを十分に辻褄の合ふだけの物語にしたのが、「曾呂利物語」であつた。江戸時代初期の文学であるが、こちらが古くて前の話はその受け売りだともいへないことは、読んだ人には容易にわかる。これは越後の座頭耳きれ雲一の自伝とある。久しくおとづれざりし善光寺の比丘尼慶順を、路のついでを以て訪問して見ると、実は三十日程前に死んでゐたのであつたが、幽霊が出て来て何気なく引留め、琵琶を弾かせて毎晩聴き、どうしても返すまいとする。それを寺中の者が注意して救ひ出し、馬に乗せて遁がしてやつた。後から追はれて如何ともしやうがないので、或寺にかけ込んで事情を述べて頼むと、一身にすぎ間も無く等勝陀羅尼を書きつけて、仏壇の脇に立たせておいた。すると比丘尼の幽霊が果してやつて来て、可愛いや座頭は石になつたかと体中を撫でまはし、耳に少しばかり陀羅尼のたらぬ所を見つけて、ここにまだ残り分があつたと、引ちぎつて持つて行つたとい

つて、その盲人には片耳がなかったといふのである。⁵

全体として柳田独特の暗示に富んだ、それでいて断定的な口調の文章で、しかも冒頭のハーンの物語の紹介が完全に間違っているために、わたしのようなハーン研究者には、なかなか頭にはいりにくいのだが、そこを整理しながら、柳田の考えを紹介しておく。

まずハーンの「耳なし芳一」が瘤取り爺さんのような話で、悪霊に気に入られて、また戻ってくるようにと耳を質草にとられた話だというのは、柳田の完全な記憶ちがいで、「耳を取るべき理由は実は明かでなかった」どころか、その理由を語るこそが、ハーンの物語の主題であり、その理由について不明な点など何一つない。こんな素朴な思いちがいが、一九二七年の雑誌発表（初出は未見）、一九三四年の単行本（『一目小僧その他』）、そして一九五七年の「定本」全集版にまで放置されてしまっていたのは、つまり、柳田のような民俗学者にとって、明治になってから外国人が英語で書いた物語など学問的にはどうでもよかったからだろう。また『曾呂利物語』について、「幽霊が出て来て何気なく引留め、琵琶を弾かせて毎晩聴き、どうしても返すまいとする」というのも、おそらくはハーンの「耳なし芳一」の印象に引きずられた思い違いで、『曾呂利物語』では座頭と琵琶はまだ結びついていない。⁶

雲一と団一

ハーンや『曾呂利物語』などの有名な文学作品より遙かに大切に重視すべきなのは、民間に口承で伝わる無名の物語である、というのが柳田の「耳切団一」の趣旨である。この「阿波の里浦」の民話は、この主題についての民俗学や昔

話研究で必ず言及される有名な報告だが、全文が引用されることはまずないので、これを初出の形で紹介しておく。

○耳切団一　徳島県板野郡里浦村に昔団一と云ふ盲目の琵琶法師があつた。ある夜一人の官女らしい者が来て、今宵御殿で宴会が催されるに依つて是非出て貰ひたいとの言葉に、団一は其晩早速行つた。斯くして毎晩其御殿に行つてゐる中に、次第に身の衰弱するのを覺えたが、あまり気にも止めないでゐた。ある旅僧が此村の墓地を通ると、一人の瘦衰へた琵琶法師が一心不乱に琵琶を弾いてゐる、旅僧は様子を聞いて、目と云はず、鼻と云はず、身体中をまじなひしたが、耳を忘れて居た。翌晩になると又例の官女らしいのが来て団一を伴れて出やうとしたが、団一の身体には禁厭ましなひ（ママ）が施してあるから中々伴れて行くことが出来ずに耳を持つて行つてしまつた。耳切団一の話として土地の人は今でも話して居る。（中島松三郎⁷）

この報告の掲載された『郷土研究』は、いうまでもなく柳田や新渡戸稲造らが設立した郷土研究会の機関誌のようなもので、柳田がここに載つた中島松三郎の報告を重視し、その価値を広く世に知らしめたいと考えたのは当然のことだつた。

先にいったように柳田の独特の書き方のために、全体の論旨が読み取りにくいのだが、あえてその見立てを書けば、こうなるだろう。ハーンが書いた「耳なし芳一」は瘤取り物語のように変形していて、なぜ耳が質草にとられるのか分からなくなっている。しかし、徳島の里浦村に残る「耳切団一」の話をみれば、まじないを忘れたために耳をとられたのだとわかる。ただ、これでも官女の霊が出てくる理由がわからないのだが、「それを十分に辻褄の合ふだけの物語にしたのが『曾呂利物語』であつた。」つまり、死んだ比丘尼の座頭への執着という理由が付け加えられたのだが、『曾

『呂利物語』は確かに古い「江戸時代初期の文学であるが、こちらが古くて前の話（里浦村の民話「耳切団一」）がその受け売りだともいへないことは、読んだ人には容易にわかる。」

団一は雲一の焼き直しにあらざうといっているのだが、このあたりがいかにも柳田らしい含みをもたせた言い方で、これを当時の民俗学の暗黙の前提にしたがって読めば、徳島の口承民話「耳切団一」は、江戸時代初期の仮名草子「耳きれ雲一」よりも、古い貴重な民俗を伝えている、ということになる。もちろん、口承民話の成立年代など確定しようがないから、こうした暗示的な言い方をせざるをえないのだが。

この柳田の論考が出て以来、国文学の分野でも、ハーンの「耳なし芳一」の物語を取り上げるとき、里浦村の口承民話「耳切団一」に言及するのが例になっている。たとえば、この分野では古典ともいべき池田弥三郎の『日本の幽霊―周辺の民俗と文学』では「人を目指す幽霊」の一章で「耳無芳一」の小節をもうけ、おおむね、柳田の論文を下敷きにする形で、ハーンの「耳なし芳一」を紹介してから、「それはさておき、徳島県板野郡里浦村にも「耳切団一」の話があったわっている。報告された文章は小泉八雲の手にかかったような作品とは違うから、ごく簡単だが、たねは全く同じである。」と、同じく『郷土研究』の報告を紹介している。そして最後に、道成寺にも似た、いかにもしつこい怪談文学として『曾呂利物語』の「耳切れうん市が事」を紹介している。順番や論述の力点は、柳田とは異なるものの、道具立てと論述の枠組みは柳田とほとんど一緒である。

もうひとつ、国文学のほうから例をひいておけば、三谷栄一もまた『物語文学史論』において「今一つは小泉八雲の怪談といふ書で有名な系統の説話で」と前置きし、同様に民話の「耳切団一」を紹介している。ただし三谷は、中山太郎の論文を参照しながら、「これ（「耳切団一」）も各地に分布して、出雲、日向、阿波にあり、常陸では耳切り屋敷として琵琶が尺八となつて伝つてゐる。」と付言している。これは柳田も池田も用いなかった情報なので、参照された中

山の論文を以下に引用し、もう少し丁寧に紹介しておく。

保元物語や平治物語が平家物語より前に作られ、琵琶法師によつて弹奏されたことは明白である。民譚だけに高く評価する事は出来ぬけれども、各地に残つてゐる『耳切り団一』の説話は、種々なる暗示を古い琵琶法師の生活に投げかけてゐるので、左に要点を抄録して私見を加へる。

昔々、琵琶法師が赤間ヶ関の阿弥陀寺の前を通りかかると一名の官女らしい者が出て来て、今宵御殿に酒宴があるから、是非来て座興を添へてくれと頼まれるままに、御殿へ往つて琵琶を弹奏し種々なる饗応になり、更に引留められので翌晩も翌々晩も御殿に居て琵琶を弹奏した。すると或日のこと一人の行脚僧が同寺の門前まで来ると、草茫々と生茂つた墓地の真中で、琵琶法師が懸命に琵琶を弾きながら何やら謡つてゐる。不思議に思ひ声をかけ様子を尋ねると、法師は今までの経過を仔細に語つた。旅僧はそれこそ先年比の壇ノ浦で亡びた平氏一族の怨霊が為す仕業である。此のままでは命が危いとて加持祈祷した咒符を、身体中に貼りつけて立ち去つた。とかくするうちに又もや官女が出て来たが咒符のために近寄ることも出来なかつたが、偶々団一の耳のところだけ咒符が貼つて無かつたので、その耳を引ツ切つて持つて往つたが、団一は生命は助かつた。それで此の琵琶法師を耳切り団一と称した。

この民譚は各地に分布してゐて、私の知つてゐるだけでも出雲、日向、阿波の三国は、同じ名の耳切り団一の話で残り、常陸には耳切り屋敷として琵琶が尺八となつて伝つてゐる。¹⁰

これは「盲人の生活と旅行」と題された論文の一節で、そもそも中山の関心は、説話文学や民話ではなく、琵琶法師

の生活の再現にあるので、仕方がないところもあるのだが、中山が往々批判される資料扱いの粗さがここにもあって、口承民話の流布を示す証拠としては使いにくいのである。

一番の問題は、ここに「抄録」された「耳切り団一」が、いつ、どこで、だれから聞いた話なのかが説明されていない点である。中山は、出雲、日向、阿波にあるのを知っているのだが、このうち、阿波というのは、柳田の紹介する徳島県板野郡里浦村の話なのだろうが、中山の「抄録」は、それとはかなり内容が違っている。つまり、「赤間ヶ関の阿弥陀寺」という地名がはっきり出ているうえに、官女の正体が「壇ノ浦で亡びた平氏一族の怨霊」と明かされている。柳田が里浦の民話について辻褄が合わないといった点が、すべて辻褄が合うように修整されてしまっているのである。その辻褄合わせが、出雲か日向で聞いた(?)という民話で生じていたことなのか、あるいは中山の記憶のなかで生じたことなのか、いや、そもそも出雲にあったというのが、内容的にも「耳切団一」の物語なのかも判然としないのである。むしろ、わたしはこの修整の背後にハーンの影響を強く疑う。わたしは中山のこの報告を「耳切団一」の流布を示す証拠としては使わないことにする。

『日本昔話通観』と「耳なし芳一」

さて、ここまで見て少し不思議に思うのは、ハーンの「耳なし芳一」に関連して民俗学や国文学で言及されるのが、決まって徳島県板野郡里浦村の「耳切団一」で、それ以外の事例が確認できないことである。柳田が推測するように、江戸時代初期の『曾呂利物語』以前から流布していたかもしれない民話なら、たとえば一九六〇年代から一九八〇年代、いわゆる「民話ブーム」のさなかに行われた、フィールドでの聞き取り作業のなかで、この里浦村の「耳切団一」

の類話が拾われてもよさそうに思うのだが、それがわたしにはなかなか見つからないのである。

たとえば、そうした調査の集大成である、稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』では「耳なし芳一」系の昔話が三話収録されている。¹¹第六卷「山形」にある「耳なし芳一」は梗概の記載なのではっきりしないが、引用元の『牛方と山姥・海老名ちやう昔話集』の「耳なし芳一」にまでさかのぼると、その冒頭が「源氏と平家が戦って、平家あ敗けて、壇の浦の戦いで平家は皆死んで平家蟹なんていうのまで背中さ喰ついていたという話だぜさなあ、人の背中さ背負つてるなんて・・・。」とハーンが独自に工夫したヘイケガニの話から物語を始めているので、この民話がハーンに依拠していることはつきりとわかる。¹²語り手の海老名ちやうは、明治二一（一八八八）年生まれで、聞き取り調査は昭和四〇（一九六五）年前後だったと推測される。¹³海老名の「耳なし芳一」は口述筆記の記録で四ページにわたる長い話なので、なんらかの形でハーンの原作が参照され、置賜地方の方言で語り直されたものと推測される。

これは拙著の「雪女」論で指摘したことだが、¹⁴一九六〇年代から八〇年代の民話ブームにおいては、本で読んだ物語を、わざわざ方言で語り直し、それを活字にして「読む」という、複雑な昔話の楽しみ方が流行していた。そしてまた、この傾向はそのまま『まんが日本昔ばなし』のような擬似的方言を多用したテレビアニメ番組の誕生につながっている。『牛方と山姥・海老名ちやう昔話集』もこうした民話集の典型で、純粋な口承民話と、書承の物語の方言による再話の両方が、ほとんど区別されることなく収録されているのである。

『日本昔話通観』に掲載されるほかの二つの「耳なし芳一」系物語も、原拠までさかのぼって確かめてみれば、やはりハーンに由来するものだと考えられる。その詳細はまた別の機会に論じたいが、とりあえずここで簡便な判別方法をひとつあげておけば、タイトルのみならず、物語のなかで語り手自身が芳一を「耳なし」と呼んでいれば、その物語は、おおむねハーンに依拠していると考えられる。「耳切り」を「耳なし」と改めたのはハーンが初めてで、それ以前

には「耳なし」という呼称は存在していないからである。

『日本昔話通観』「徳島・香川」には「耳なし」とは別見出しで、「耳切り団一」も載っている。いうまでもなく、これは里浦村の民話「耳切り団一」である¹⁵。

『日本昔話大成』と「耳なし芳一」

関敬吾の『日本昔話大成』は、『日本昔話通観』と並ぶ、もうひとつの代表的な民話集成だが、ここにも「耳切団一」という見出しが立てられている¹⁶。里浦村の民話は、もちろん、ここにも引かれているが、本文で一番先に紹介されているのは、意外にも「鬼婆に耳から食われた話」という別の話である。引用元の『磐城昔話集』も参照しながら、この粗筋を紹介しておく¹⁷。

昔、山寺に小僧がいた。山で遊んでいると、帰り道がわからない。「小僧、待て待て」という声に逃げるが、鬼婆が追ってくる。途中、川があつて、船に飛び乗るが、鬼婆は蛇になって追ってくる。寺に戻ると、和尚は小僧の身体にまなく「南無阿弥陀仏」文字を書いて鐘のなかに隠す。蛇は鐘にからみつき、落ちた鐘から小僧を出す、阿弥陀仏の文字のせいで食うことができない。しかし耳だけ書き忘れていたために小僧は蛇に耳から食われてしまう。

どこかで聞いたことのあるような、つぎはぎの印象の強い物語だが、元の本は、一九四二年に出版されており、話者は小名浜町、丹野保氏、六五才と明記してあるので、口承民話の記録としてきわめて優良な資料である。これが「耳切団一」の見出しの下に類話として収録されているのは、ひとつには「耳切り」というモチーフが共通していることと、もうひとつは、編者の関敬吾が昔話の形式的分類と体系的整理に取り組んだ研究者で、師匠であった柳田が先に引用し

た論文のなかで「耳切団一」を、これら山寺の小僧の災難と同じく、逃竄譚に分類しているためである。

「耳切団一」の見出しの下にもうひとつ類話として紹介されているのが、南魚沼郡の話で、これは『日本昔話大成』の紹介をそのまま繰り返しておく。「前半は三枚の護符型」とあるので、三枚の護符の呪力で次々と危難を逃れてきた小僧が、和尚に助けを求め、体中にお経を書いてもらう。山姥がやってくる、小僧のかわりにお地蔵さまがいる。しかし、片方の耳に、お経を書き忘れていたために、耳を食い切られてしまうという話で、これまたつぎはぎの印象が強い。

もちろん、物語の型の分類は重要な研究であるが、この論文のように「芳一ばなし」の近世以降の歴史的展開とジャンルの移動を考察しようという立場からすると、これら三枚の護符型物語の派生形にまで視野を広げるのは賢明なやり方ではない。また「耳切り」は確かに大切なひとつのモチーフではあるが、このモチーフそのものの広がりを追うことも、本稿の目的ではない。「芳一ばなし」の骨子は、盲目の座頭と悪霊による「耳切り」であって、さらにいえば、琵琶の演奏を通しての平家滅亡の物語との結びつきである。こうした物語の歴史的伝承と展開を追うことが本稿の目的なのである。

「耳切団一」と『宿直草』

結局、口承とされる民話で、唯一「芳一ばなし」系と認められる、徳島の民話「耳切団一」は、いつどこから誕生したのだろうか。『曾呂利物語』以前、と柳田国男は示唆しているようだが、わたしは『曾呂利物語』以後だろうと考えている。具体的には「耳切団一」の出典は『曾呂利物語』（寛文三、一六六三年）から十数年後に書かれた『宿直草』

(延宝五、一六七七年)にちがいないと、見当をつけている。

その理由については、もう少し丁寧に論じなくていけないのだが、ここでは簡便に、主人公の座頭の名前が一致していることをあげておく。「芳一ばなし」の系譜に、主人公の座頭の名前を付け足せば、以下のようになる。

「うん市」…「耳切れうん市が事」『曾呂利物語』

「団都(だんいち)」…「小宰相の局、ゆうれいの事」『宿直草』

「鶴都(かくいち、あるいは、つるいちと読むか?)」…「赤関留幽鬼」『御伽厚化粧』

「芳一」…「琵琶秘曲泣幽霊」『臥遊奇談』

“Hōichi”: “The Story of Mimi-Nashi-Hōichi” in *Kwaidan*

徳島の民話「耳切団一」と主人公の名前が一致するのは、『宿直草』の「団都(だんいち)」だけである。話の内容も、この五話のなかでは『宿直草』にもっとも近く、ほぼ同一といえる。大きく異なるのは、民話では、『宿直草』に見える赤関、小宰相の局という固有名詞が消されていることであるが、これは民話を里浦村の出来事としてローカライズするための処理と考えられる。この処理が容易だったことが、「芳一ばなし」の類話から原拠として『宿直草』が選ばれた理由だった可能性もあるだろう。

『宿直草』について、高田衛の解説の言葉を引けば「先行した『曾呂利物語』から題材を得ている部分もあるが・・・面白いだけでなく、相当に水準の高い怪談集になっている。(異版の)『御伽物語』以後も、改版されたり、分割板行されたりして、その都度別の名で行われ、江戸時代を通じて、読者の絶えなかった一冊である¹⁸」という。つま

り『宿直草』は江戸時代から相当人気があり、また流布した仮名草子であったから、徳島の「耳切団一」がここから派生したと考えるも不自然ではない。それとは逆に、徳島の「耳切団一」（一九一四年報告）のような口承民話をもとに『宿直草』の「小宰相の局、ゆうれいの事」（一六七七年）が書かれたという推定は、時間的なへだたりとその報告例の乏しさから、現段階では成立しないと考えるべきだろう。

口承民話「耳切団一」が、どうやら『宿直草』の「小宰相の局、ゆうれいの事」から固有名詞を削りとることで成立したらしいということは、本稿の冒頭に掲げた第二の問題、つまりハーンの「耳なし芳一」のどこが特殊で、なにが口承化をさまたげていたのかという疑問を考えるための重要なヒントとなる。わたしはひとつの仮説として、「芳一ばなし」のストーリーが、『宿直草』で座頭と琵琶が組み合わせられてから、平家の怨霊と結びつき、だんだんと壇ノ浦での平家滅亡の物語と一体化し、ハーンの「耳なし芳一」に至ると、もはや赤間関や阿弥陀寺、安徳天皇といった地名人名と切り離せなくなってしまうからではないかと考えている。物語の口承民話化——とりわけ方言を用いた語りには、多くの場合、地名や人名の変更によるローカライズが必要だが、ハーンの「耳なし芳一」の場合、それが非常にむずかしくなっていたのである。こうした理由もあって、方言を用いた口演者からはあまり愛されなかった「耳なし芳一」だが、盲目の琵琶法師と平家の怨霊たちの交流を描く、ハーンの傑出した聴覚・視覚表現とストーリー・テリングは、民話の次の芸術的展開、マンガ、アニメ、映画では明らかに歓迎された。現代日本における「耳なし芳一」の高い評価と知名度は、この多面的なメディア展開と無縁ではないのだが、この結論は、「芳一ばなし」の成立過程とあわせて論じるほうが理解しやすくなると思うので、また機会を改め論じることにする。

謝辞

本研究はJSPS科研費(18K00417)の助成を受けたものです。

注

1 遠田勝「百物語・民話・近代小説―ハーンと民俗説話の変容」、二〇一五(平成二七)年、神戸大学近代発行会『近代』第一一三号、一―一七ページ。

遠田勝「ラフカディオ・ハーン「貉」とノッペラボウ物語の誕生―「日本」を語るオリエンタリズムと近代日本における「民話」の創出」、二〇一六(平成二八)年、神戸大学近代発行会『近代』第一一五号、一九―三九ページ。

2 遠田勝『〈転生〉する物語―小泉八雲と「怪談」の世界』、二〇一一(平成二三)年、新曜社。

3 室田浩然「「耳なし芳一のはなし」と「臥遊奇談」との関係」、『解釈』、五(八)(五二)、一九五九年八月、二七―三〇、三四―三四ページ。

門脇禎「小泉八雲の再話作品について―「耳なし芳一のはなし」」、『帝京国文学』、二、一九九五年九月、二八〇―二九五ページ。

広瀬朝光『小泉八雲論…研究と資料』、笠間書院、一九七六年、一九―三三ページ。

志村有弘「小泉八雲の「耳なし芳一」と阿弥陀寺」、『大法輪』、八二(三)、二〇一五年三月、一八二―一八七ページ。

中田賢次『小泉八雲論考―「怪談」を中心として―』、私家版、二〇〇三年、一―九ページ。

中田賢次「「耳なし芳一の話」の原話をめぐって」、『比較文学研究』、四七号、一九八五年四月、一三五―一四三ページ。
宮田尚「「芳一ばなし」から「耳なし芳一のはなし」へ」、『梅光学院大学・女子短期大学部論集』、三九、二〇〇六年、一三―二二ページ。なお、この論文の二二ページには、『曾呂利物語』『宿直草』『御伽厚化粧』『臥遊奇談』『怪談』の「芳一ばなし」五話の詳細な内容比較の一覧表が付されており、この主題を考察するには至便である。

4 各作品について本稿で参照したテキストは以下の通り。

「耳切れうん市が事」、高田衛『江戸怪談集(中)』、岩波書店、一九八九年

「小宰相の局、ゆうれいの事」、高田衛『江戸怪談集(上)』、岩波書店、一九八九年

「赤閑留幽鬼」、『徳川文芸類聚(第四)』、国書刊行会、一九一五年。

「琵琶秘曲泣幽霊」、平川祐弘編『怪談・奇談』、講談社学術文庫、一九九〇年。

“The Story of Mimi-Nashi-Hōichi” in *Kwaidan: Stories and Studies of Strange Things*, Houghton Mifflin Company, New York, 1904.

5 『定本 柳田国男全集』第五卷、筑摩書房、一九六二年、二〇六―二〇七ページ。なお引用にあたって、旧字、異体字などは字体を改め、踊り字は仮名に改めている。以下も同じ。

6 「芳一ばなし」で座頭と琵琶が結びつくのは、『宿直草』の「小宰相の局、ゆうれいの事」からで、結びついた理由については、広瀬朝光『小泉八雲論…研究と資料』に面白い仮説がみえる。

7 『郷土研究』、第二巻四号、一九一四年六月、五七ページ。

8 池田弥三郎『日本の幽霊―身辺の民俗と文学』、中央公論社、一九五九年、一〇一ページ。

9 三谷栄一『物語文学史論』、有精堂、一九八六年、六九ページ。

- 10 中山太郎『生活と民俗』、三笠書房、一九四二年、二五〇ページ。なお、この「盲人の生活と旅行」という論文は礫川全次編『タブーに挑む民俗学…中山太郎土俗学エッセイ集成』、河出書房新社、二〇〇七年、一二七―一四三ページに再録されている。礫川の注によれば(二四八ページ)、この論文の初出は『交通文化』第二号(一九三八年)の「盲人の旅行」であるという。
- 11 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』第六卷「山形」、同朋社、一九八六年、四八九ページ。第二〇卷「広島・山口」、一九七九年、四四一ページ。第一〇卷「新潟」、一九八四年、六一九ページ。
- 12 海老名ちやう『牛方と山姥…海老名ちやう昔話集』、非売品、一九七〇年、四九―五三ページ。
- 13 海老名ちやう『牛方と山姥…海老名ちやう昔話集』、三二九―三三四ページ。
- 14 遠田勝『〈転生〉する物語…小泉八雲「怪談」の世界』。
- 15 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』第二二卷「徳島・香川」、同朋社、一九七八年、三九五ページ。
- 16 関敬吾『日本昔話大成』第六卷、角川書店、一九七八年、一五七ページ。
- 17 岩崎敏夫『磐城昔話集(全国昔話記録)』、三省堂、一九四二年、五四ページ。
- 18 高田衛『江戸怪談集(上)』、三九六ページ。

オリエンタリズムと「日本」を語る「民話」 のメディア展開

——Lafcadio Hearn の "The Story of Mimi-Nashi-Hôichi" を 例として

遠 田 勝

ラフカディオ・ハーンの「耳なし芳一」は、『怪談』の巻頭を飾る作品であり、その知名度からいっても完成度からいっても、ハーンが日本で目指した再話物語の頂点を示す傑作である。これまでわたしは「雪女」や「貉」といったハーンの代表的怪談をとりあげ、その材源の研究・成立過程の考証と相補する形で、それぞれの作品が、ハーンの没後、とりわけ第二次世界大戦後に学術的・芸術的関心の中心に躍り出た「民話」というジャンルのなかに、どのように取り入れられ、どのように影響を与えてきたかを調べてきた。その過程で、「民話」における、学問的曖昧さや偽装を批判し、また逆に、その多方面への芸術的展開、とくに口承文芸や、方言を用いた語りの創出、また「民話劇」に代表される舞台芸術や、一九五〇年代の、まだ登場したばかりのテレビやアニメとの連携に注目し、その成果や意義に目を向けてきた。本論文ではこうした観点から「耳なし芳一」を論じた。

キーワード：ラフカディオ・ハーン、「耳なし芳一」、民話、オリエンタリズム